二十四節気で見る静原の自然

二十四節気とは、農作業を正確におこなうために、季節感を正しく把握する目的でつくられたものです。簡単にいうと、二十四節気の立春、立夏、立秋、立冬の四立を「四季」の始まりとし、一太陽年の長さを二十四等分したものです。

- 農作業
- 動植物
- 伝統行事

1 睦月

●年初めには、まず静原神社にお参りし、「五穀豊穣」と「家内安全」をお願いしてから、となりの阿弥陀寺へも新年のご挨拶と先祖へのお参りをされる方が多く見られます。
●今年の作付け計画や種籾、資材、機械類の整備等の計画を立てます。

2 如月

●日増しに日射が高く感じられる「立春」の頃、畑作物の手入れや、残滓(ざんし)の片付け、水田の耕転作業にとりかかります。

花祭り

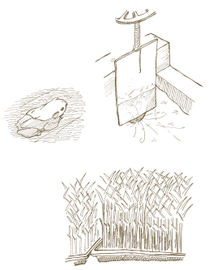
3 弥生

●田畑の水路、土手などの手入れが本格化します。
●四方の山々に「コブシ」の白い花が咲き始める頃になると、各農家の庭先に早苗作りのための育苗機が並びだします。(最近は機械による田植えの為、苗代田は見られなくなった)

烏帽子儀

4 卯月

●4月10日の「烏帽子儀(えぼしぎ)」の頃、水田への用排水路や頭首口の共同手入れ作業が日を決めて、一斉に行われます。
●市街地より少し遅れて桜が里のあちらこちらに咲き始めると、村が急に活気づきます。



5 皐月

●ゴールデンウィーク中に田植えをするところが多く、5月3日の神社の祭りの準備等で前の日はごった返します。
●田植えを終えた田んぼに満月が影を落とす頃に、蛙の合唱が聴こえてくる光景は、一幅の墨絵を見ている様で、一見の価値があります。

春季礼祭

6 水無月

●田植えが終わると、待っていたかのようにシカが現れ、植えた早苗を食べるため、近年では早々に防護用の電気柵等の設置をするのが追加作業になりました。
●最近は静原の「芋掘り(サツマイモ)」が盛んになり、その植え付けがピークを迎えます。(梅雨の前に作業を終える必要がある)
●旧暦での端午の節句でチマキを作る家は、匂いショウブとヨモギを、屋根の上へ放り上げたり、頭に鉢巻きをしたり、風呂に入れたりと、そんな姿を今でも見受けます。
●梅雨の前後にホタルが乱舞します。

お火炊き祭

秋季礼祭

10 神無月

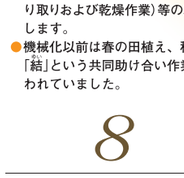
●大根・白菜の種まきや植え付け等の畑野菜の作業が始まります。
●コスモスが風にそよぐ頃には、子どもたちの歓声が田畑に響き、サツマイモ掘りが始まります。
●玉ねぎ植え付け、野菜の手入れ、サトイモ等の収穫を行います。
●彼岸花があぜ道の土手に顔を出し、アキアカネが山から下りて来て乱舞する光景もまた、カメラの絶好の被写体になっています。
●静原神社の境内のモミジや公園の銀杏が色づき始めると、写生を楽しまれる方も。

9 長月

●秋の収穫作業は機械化が進み楽になったとはいえ、春の田植えより気が置けない作業です。天気と熟し具合を見計らいながら、兼業農家では休日と機械の手配(刈り取りおよび乾燥作業)等の段取りに苦労します。
●機械化以前は春の田植え、秋の収穫時は「結(ゆい)」という共同助け合い作業が盛んに行われていました。

8 葉月

●土手に刈り残されたカンゾウや野アザミに混ざってコスモスが咲き始めると稲刈りの準備に取り掛かります。


田の虫送り

7 文月

●農作物が害虫や病気に罹っていないか、水加減や追肥の時期はどうか等々、見回りが続きます。
7月14日の「田の虫送り」は昔ながらに盛大に行われ、カメラの絶好の被写体です。
●追肥をするには十分な水張りが必要なため、水路の補修・手入れを再度行います。
●小川や里山にヤマブキやウツギが咲き始め、渡り鳥のカッコウが初夏を告げる頃、あぜ草刈りに日々追われる季節です。
●見事に緑の絨毯を敷き詰めた水田にシロサギやアオサギがカエルを探して舞い降ります。

11 霜月

●周辺の山々が色とりどりに装いだす頃になると、秋野菜の収穫時期を迎えます。
●紅葉の見頃は11月下旬～12月初旬。

12 師走

●秋から冬にかけては、稲藁を利用した作品づくりに精を出す方々も見受けます。
●大豆・ごぼう・金時にんじん・大根・白菜・ネギなどの正月用の野菜を取り込みます。
●神社の境内でも、老人会を中心に正月飾りや大杉飾り用の太いしめ縄を数人一組になって作ります。

静原と農

私たち農家が、高価な機械に見合うだけの収入が期待できないことを承知しながら、稲作を続ける訳を知りたいと思いませんか？

この地で育ち、この環境で百姓をしてきた方々の心の底には、郷土を愛し、自然を愛してやまない、土地を守ろうとする気概すら感じとれます。最近になって声高に叫ばれだした環境に対する考えは、昔から受け継がれてきている行いの中に、自覚しないが育まれていたのだと思えます。農に対するリスペクト(尊敬念)が今も生き続けているのではないでしょうか。

静原では、稲作は早稲種が主である為、9月に入れば収穫作業が始まります。暑い天気の元での作業になることがあります。以前は6月田植え、10月稲刈りでしたが、機械化と兼業化で、相対的に早くなったようです。機械化以前は、春の田植え、秋の収穫時は「結(ゆい)」という共同助け合い作業が盛んに行われていました。秋の取り入れは、機械化が進んだとはいえ、雨天は作業できないというデメリットもあります。

旬のものを旬の時期に、新鮮な農作物を時間を経ずに消費者に提供できる朝市、有機栽培農業に取り組む農家が増えてきています。

静原産の野菜は、市内の有名料亭やホテルで提供されて注目を集めています。大量生産・大量消費・大量廃棄とは一線を画した農業がなされています。

しかし、問題点も多数抱えています。獣害問題、耕作が放置されている田畑の増加、若者の農業離れ等々…。

最後に、「生きることは、食べることである」ということを、もう一度考えてみて下さい。

静原昔ことば

静原には、昔、地域独自のことばがありましたが、今はほとんど使われていません。若い人たちにとっては不思議なことばかもしれませんが、ほんの少し覚えるだけでも歴史が見えてくるかもしれません。

オカアがニワのハシリでコロモンを切ってる
▶ お母さんが、土間の台所で漬物を切っています

テショにサイ、モッテタモ
▶ 小皿におかずを入れてちょうだい

もっとスダレ
▶ もっと後ろに下がりなさい

正月にホンビキセンタモレ
▶ お正月にはお年玉を下さいね

タモウ・タモレ／してタモウ
▶ もらう・ください／してください

ワレ、大事なもんはソラに置いとけや
▶ あなた、大切なものは棚の高い所に置いておいて

ナタ、いつワサッタンヤ
▶ あなたはいつどこから来たのですか？

アミダノサカにせんと、アンジョウあそんだってや
▶ 仲間外れにしないで、ちゃんと遊んであげてね

ソチは、いつモンデクル
▶ あなたはいつ帰ってくるんですか？

あした、キテタモカ
▶ 明日来て下さい

ワレ、シクタレモン(シガンダ)やね
▶ あなたは弱虫やね

静原の伝統行事

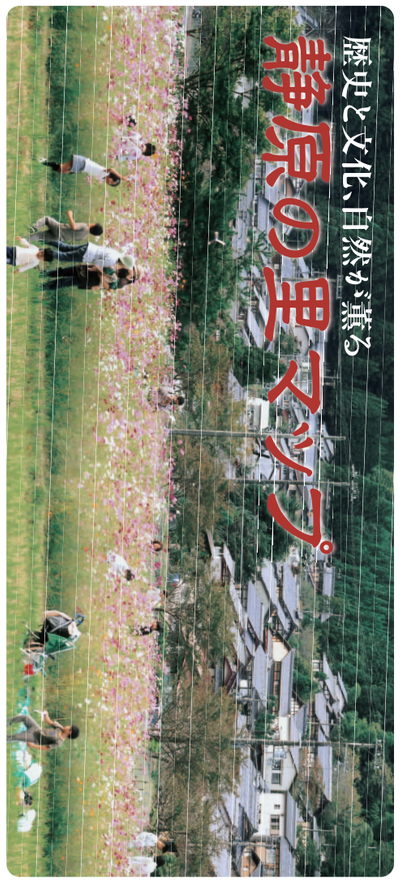
月	行事
1月	**どんど(左義長)**(一月十五日)　正月のしめ縄や門松を持ち寄り静原神社で焼却します。
12月	**初詣**　元日には地元の氏神である静原神社へ参拝し、新年の家内安全・無病息災を祈願します。
11月	**お火炊き祭**(十二月第一日曜)　一年間お奉りしたお札や締め縄などを燃やします。女の子による御幸持ちが行われます。この時の御供はミカンと柿です。
10月	**愛宕さん**　石灯籠のある町内会(隣組)では、毎夜輪番制でロウソクを点け、毎夜安全を祈願します。また、年三回行われる「愛宕講」では、会場となる家に人が集まり、飲み食いをしながら親睦を深めたり、町内の事が話し合われます。
9月	**秋季礼祭**(十月十日に近い日曜日)　女の子による御幸持ちが行われます。この時の御供は茹でた枝豆と栗です。
8月	**静原伝承太鼓**　静原の伝統行事で演奏される鉦と太鼓で、「祭り太鼓」、「田の虫送り」、「雨乞い」の三つの調子で演奏されます。十数年前から静原小学校児童により演奏されており、太鼓を習得した高学年児童が低学年児童を指導し、その音色を絶やさないよう伝承しています。
7月	**田の虫送り**(七月十四日)　稲の害虫を村はずれまで追却する呪的行事で、現在では小学生による鉦と太鼓に合わせて松明行列が、町内を練り歩きます。夜道を行く松明の光が幻想的です。
6月	
5月	
4月	**春季礼祭**(五月三日)　静原で一番盛大に行われるお祭で、わらじに白帷子姿の男性によって静原神社から下ノ宮(天皇社)までを神輿を担いで練り歩きます。女の子(小学校五年)による御幸持ちが彩を添えます。また、子どもたちによる祭り太鼓と子ども神輿が祭りを盛上げてくれます。米粉で作り、食紅で彩った様々な形の御供は、祭りが終わった次の日におさがりとして各町内に配られます。
3月	**烏帽子儀**(四月第二日曜日)　その歴史は鎌倉時代までさかのぼり、元は成人を迎える長男(その年に数え年十七歳になる男子)の元服式として四月十日に行われていました。四半世紀くらい前までは、長男がいる家では親戚中が集まり、盛大に祝っていましたが、一時、途絶えてしまいました。数年前より復活し、形を変えて行われています。現在はその年に数え年十八歳になる男子が対象で、式では諡を披露します。
2月	**花祭り**(四月八日)　四月八日に阿弥陀寺で行われるお釈迦様の誕生日を祝うお祭。子供たちがきれいに着飾って集落の中を一周し、そのあとお寺でお経を唱えて誕生仏の像に甘茶をそそぎます。

二十四節気：大寒 小寒 冬至 大雪 小雪 立冬 霜降 寒露 秋分 白露 処暑 立秋 大暑 小暑 夏至 芒種 小満 立夏 穀雨 清明 春分 啓蟄 雨水 立春

十二支の語源

十二支は草木の発生・繁茂・成熟・伏蔵の過程を表す。また、方位や時の特性も示す。

- 子(し)　旧暦十一月。新しい生命が種子の中に萌し始める。(ふえる)
- 丑(ちゅう)　旧暦十二月。萌芽が生じるが、伸びきれない。(からむ)
- 寅(いん)　旧暦一月。草木が発生する状態。(うごく)
- 卯(ぼう)　旧暦二月。草木が地面を覆う。(おおう)
- 辰(しん)　旧暦三月。草木の形が整って活力が旺盛になる。(ふるう)
- 巳(し)　旧暦四月。草木が繁殖の極限に到達する。(やむ)
- 午(ご)　旧暦五月。草木の繁殖が少し衰える。(つきあたる)
- 未(び)　旧暦六月。果実が成熟し滋味を生じる。(あじ)
- 申(しん)　旧暦七月。果実が成熟し固くなる。(うめく)
- 酉(ゆう)　旧暦八月。果実が熟れ過ぎる状態。(ちぢむ)
- 戌(じゅつ)　旧暦九月。草木が枯れていく状態。(ほろぶ)
- 亥(がい)　旧暦十月。草木が枯れ果て、種子が閉蔵される。(とざす)



静原について

静原は、農家や簡易に携わる人の多い、150世帯・500人規模の静かで美しい里です。春は桜道、夏は緑の山々、秋の紅葉、冬は雪景色と自然豊かな環境の中で、住む人の日々の暮らしがあります。

明治22年まで「静原村」として変容郡に属していましたが、その年の市町村制施行で、隣接する市原村・野中村と合併して「静市野村」になりました。昭和24年に、京都市左京区に編入して「静市静原町」となり現在に至ります。

春

夏

秋

冬

静原の里マップ
URL：shizuhara.net

企画・制作：静原の里マップ／京都産業会議
企画協力：京都工芸繊維大学 佐々木厚司ゼミ・研究会
発行・お問合せ：左京区役所まちづくり推進課 075-702-1029
発行日：平成24年3月　京都市印刷第234842号